

True Rhetoric in Plato's *Phaedrus*

Yasuhiro WAKIJO

In the second half of the *Phaedrus* Plato tries to present what he takes to be the 'true rhetoric', the art of persuasion, replacing the sophistic rhetoric which he criticises severely. The first section of this paper gives an overall textual interpretation of the relevant passages, especially focusing on the role of knowledge (knowing what is true), which is supposed to be, according to Plato, indispensable if one is to attain the true art of persuasion. Then in the second section general reconstruction of Plato's method is outlined, in order to evaluate his claim that one cannot persuade 'scientifically' without knowledge.

Plato's true rhetoric involves two kinds of knowledge: knowledge of the subject matter and knowledge of the soul. It is quite reasonable to think that one needs the latter for persuasion. Further, if we take Plato's method to consist of two successive steps, viz. the dialectical step and the speech-constructing step, knowledge of the subject matter is required in the first, dialectical step. Since this is the knowledge of the meanings of the various words used to persuade, it is difficult to argue against Plato that this is unnecessary and that opinion instead of knowledge will suffice. In order to conclude, however, that Plato's claim is valid, we need to show that Plato's 'art' can effectively be used to construct a persuasive argument in actual situations. For that purpose an attempt is made to give some practical examples of finding a persuasive argument by Plato's method. The result may not be conclusive, but to what extent Plato's 'art' is fit for actual use is shown to be worth investigating.

プラトン『パイドロス』における真の弁論術

脇 條 靖 弘

プラトン『パイドロス』において、リュシアスのスピーチに対する評価に端を発した議論は、対話篇の後半部分において、本当の弁論術とは何かという問いに答えようとする対話に収斂していく。具体的には、考察はいくつかの段階を踏んで進められている。まず、258dにおいて、「文章を書くということそのことだけをとってみれば、それは恥ずべきことではない」ことが確認された後、「では、どういうやり方が立派に (καλῶς) 書くことであり、どういうやり方がそうでないのでしょうか (258d)」とパイドロスは^{*1}問う。これが最初の問題である。最初の問題は、もっぱら「書くこと」についてのものであるが、すぐに考察は「書くこと」だけでなく「語ること」も含めたものへと拡張され、「言論をどのように語り、また、書くのが立派であり、どのようにすれば立派でないのか (259d)」が考察の対象となる。そのためには、真実を知る必要があるのではないかというソクラテスの提案に対して、パイドロスは「弁論家になろうとする者が知る必要のあるもの (260a)」は真実ではないと聞いていると応じる。そして「技術によって説得するという (260d)」、「技術によって語ること、書くこと (261b)」に真実を知ることが必要かどうかを考察の焦点が合わせられることになる。ソクラテスは、「弁論術とは、魂を言論を通じて導くこと (ψυχαγωγία τις διὰ λόγων)」であり、どのような場面であれ、また、どのような事柄についてであれ、それは同じ技術のはずであると言う。このように、考察は「立派に書くこと」について始まるが、それは「語ること、書くこと」へと拡張される。そして、「立派に (καλῶς)」は「技術によって (τέχνη)」と同一視され、それは結局真の弁論術とは何かの問いへと収斂するのである。その議論は274bまで続くが、そこでもっとも力を入れて論じられているのは「真実を知ること」の必要性であり、その「真実を知る」ための方法が総合と分割の方法からなる問答法(ディアレクティケー)であるとされている。その中心議論が終わったあと、274bでソクラテスは「では、言論の

^{*1} この台詞は大多数の校訂ではソクラテスに割り当てられているが、パイドロスの台詞とする元の写本の読みに従う。Cf. Ryan 243.

技術性、非技術性についてはこれで十分としよう」と述べ、中心議論を締めくくり、「では残っているのは、書くことの適切さと不適切さについてのことだ」と最初の問いに戻っていく。

本論文では、上のような議論によってプラトンが『パイドロス』において提示した真の弁論術とはどのようなものなのか、そして、そこで不可欠とされる「真実を知ること」がどのような仕方です得という目的に貢献するのかを明らかにすることを目指す。第一節では、テキストにそってプラトンの議論の骨組みをたどり、特に、真実を知ることの必要性との関わりに重点を置いて、本当の弁論術がどのように描かれているかを見る。第二節では、第一節のテキスト解釈に基づいて、プラトンの方法のエッセンスを一般的な形で提示し、真実を知ることが必要とされるプラトンの方法が説得の方法として有効であるかを考察する。

1 『パイドロス』のテキスト解釈

ソクラテスは、真の弁論術を獲得するには、真実を知る必要があると主張する。ここでは本当の弁論家は真実を語らなければならないと言われているのではない。むしろ、真の弁論術は「どんな二つのものでも似せて見せること」ができるし、「他の人がこっそりかくれて似せて見せようとしてもそれを明るみに出すこと」ができる (261e)。真の弁論家は「他人を欺き、自分が欺かれないうようにしようとする者 (262a)」である。彼の技術は、「一つの有るものから出発して導きながら、その都度少しずつ離れて正反対のものへと類似性を通してちょっとずつ移動する、あるいは、自分自身はそのことを逃れるという技術 (262b)」なのである。真の弁論術は、欺きも含めた説得の技術であり、その技術を用いた説得の内容が真実である保証はない。

以下、プラトンの言う真の弁論術に関して、真実を知ることの必要性との関連に重点を置いて、関連するテキストの内容を吟味する。

1.1 馬とロバ、国家と善悪の例：260a-260e

吟味のはじめに、ソクラテスは、真実を知らないで説得を行なった場合に結果がよくならない事例を二つ挙げる。一つ目は、大きな耳を持つ動物ロバのことを「馬」だと誤った者が馬が有用だと説得する場合、二つ目は、悪であるものを善だとして国家をそれをなすように説得してしまう場合である (260d-d)。

これらは説得による結果が悪いケースであり、その結果は作物の悪い「収穫」にたとえられている。

これらの事例はたしかに説得において真実を知らないことが悪い結果をもたらすケースであるが、いずれのケースにおいても説得自体は成立していることに注意しなければならない。これらは真実を知らないことが説得を失敗させるケースではない。だから（ソフィスト的）弁論術は実際この後すぐに反論を述べる。真実は知るがよい、しかし、その後で私（ソフィスト的弁論の技術）をもたずしてよりよく説得することはできないだろう、と（260d）。ソクラテスとパイドロスはこの反論が正当であることを認め、次の議論の段階に移っていく。弁論の技術というのは、本当に真実を知ることなしに成立するのか。これが議論の本題である。

1.2 反対弁論をする言論たち：260e-262c

この本題について、「反対弁論をする言論たち（260e）」が登場し、ソフィスト的弁論術は技術ではなく、実は真実を知ることなしには、弁論の技術、説得の技術は成立しない、と論じる。すでに述べたように、この箇所ですら弁論術が「魂を言論を通じて導くこと」とされ、さらに、それがいかなる場においても、また、いかなる主題についても、同じ一つの技術であることが主張される（261a-b）。この技術によって人は「（そうできるものなら）どんな二つのものでも似せて見せることができる。そして、他の人がこっそりかくれて似せて見せようとしてもそれを明みに出すことができる（261e）。」欺きが生じやすいのは、大きく異なっているものよりも少ししか異なっていないものにおいてであり、少しずつ移動するほうが、大きく移動するよりも気づかれにくい。そしてそのためには、人は「ものごとの類似性と非類似性を正確に知り抜く必要がある」とされる。そしてそのためにそれぞれのものの真実を知る必要がある、というのがこの言論たちの主張である。

1.3 事例研究：262c-266c

ここまでの議論を受けて、対話篇の前半にあった三つのスピーチについて、「技術に欠けるもの」と「技術によるもの」を見るためにその吟味が行われる。リュシアスのスピーチはまったく技術を欠いたものであるのに対して、「二つの言論（τὼ λόγῳ）*2」の中には、「どうやって、真実を知っている人（ὁ εἰδὼς

*2 「二つの言論」が何を指すかについては、解釈が分かれている。(1) リュシアス

τὸ ἀληθές) が言論の中で戯れて聞く者たちを逸らせて導く (παράγοι) か」を学ぶ材料がある。ソクラテスの二つのスピーチは言論の技術を用いて語られていたのである。^{*3} こうして、リュシアスのスピーチとの対比において、ソクラテスの二つスピーチのどこに技術性があつたのかが議論の焦点となる。

1.3.1 リュシアスのスピーチ：262e-264e

リュシアスのスピーチはまず、定義の欠如を批判される。言葉には、「鉄」や「銀」のように皆が同じものを思い浮かべるものと、「善」や「悪」のように、異論があるものとがある (263a)。弁論術は後者の場合により大きな力をもつ。弁論の技術をもつためには、まずこの二つを体系的に分割しなければならない。そして、「大衆の意見が必然的に定まらないものとそうでないもの、そのそれぞれの種類の特徴的な性格を把握しなければならないのだ (263b)」と言われる。そして、それぞれ自分が出会うものについて「それがどちらの種類に属するかを鋭く知覚しなければならない」とされる。リュシアスのスピーチの主題である「恋 (エロース)」は異論の多い後者の種類である。だから、ソクラテスの二つのスピーチにおいて、それが害悪であると論じた後で、まったく反対に、それが最大の善であると論じることができたのである。ソクラテスのスピーチにおいては、はじめに恋が定義されているのに対して、リュシアスのスピーチにおいては、その定義がない。^{*4}

定義の欠如という論点に関連して、リュシアスのスピーチは、さらに有機的構成を欠いている点で批判される。それは定義で始めるべき議論を、むしろ結論から逆に論じてしまっている (264a)。また、議論のそれぞれの部分がある場所に置かれている必然性がない。「議論の全体はちょうど動物のようになにかそれ自身の身体を持って構成されなければならない、・・・頭がなくてもいけないし、足がなくてもいけない。まん中も端もなくてもいけない。そして部

のスピーチとソクラテスの最初のスピーチの二つを指す (Robin)。(2) リュシアスのスピーチと、ソクラテスの二つのスピーチを一つを数えて、その二つを指す (Hackforth, de Vries)。(3) ソクラテスの二つのスピーチを指す (Row, Nehamas and Woodruff, Scott)。二つのスピーチの語り手が「真実を知っている者」と言われていることから、リュシアスのスピーチを「二つの言論」に含める (1) と (2) の解釈は退けられるという Scott の意見 (186) に賛成する。

^{*3} ソクラテスは、例によって自分の無知を主張し、その技術が自分の技術ではなく、この地の神々の技術だと主張する (262d)。

^{*4} 定義の必要性は、ソクラテスの一つ目のスピーチのはじめにおいても強く主張されていたことである (237c-d)。

分のそれぞれと全体にふさわしいことが書かれなければならない (264c)」とソクラテスは主張する。

1.3.2 ソクラテスの二つのスピーチ：264e-266b

続いて、ソクラテスの二つのスピーチが、恋の非難から賞賛へと反対のことに移行できた理由が吟味される (265c)。それは狂気 (μανία) という一つの種類の把握とその分割である。狂気には「人間的な病から生じるもの」と「慣れ親しんだ習慣からの神的な解放から生じるもの」の二種類があり、後者は四つに分割された。予言術、秘儀、詩的靈感、恋である (265b)。問答法 (ディアレクティケー) は総合と分割の二つの方法からなる。総合の方法は、「多くの場所に散らばっているものを見渡して一つの姿へと導くこと (265d)」であり、定義のためになされる、と言われている。分割の方法は、自然本来の関節にそって「再びそれぞれの諸相へと分割できること (265e)」である。

その二つの言論は、まず思考が正気を失なった状態を、何か一つの共通な種類として捉えた。そして、一つの身体から自然本来にしたがって二つの同名のものがあるように、つまり、左半身と残りの右半身と呼ばれているものがあるように、そういうふうになら二つの言論は、思考が狂った状態をわれわれの内に本来ある何か一つの種類とみなした上で、一方の言論は左の部分を作り分け、さらにそれを切り分けるのを止めなかったのだ、それらの中に何か左の(悪い)恋と呼ばれるものを見つけて、それを正当にも大変はげしく罵倒するまでは。そして、もう一方の言論は、狂気の右側の方へとわれわれを導いて、さっきと同じ名前をもつだけでも、逆に何か神的な恋を見つけて、それを前面に展示して賞賛したのだ、われわれにとって最大の善の原因だ、とね。(266a-b)

これは以下のように解釈できるだろう。真の弁論術を持つ者は、まず、さまざまな言葉のうち、「鉄」や「銀」のような異論のないものと、「善」や「悪」などのように異論の多いものを体系的に区別する。そして、「恋」は後者に属することを理解する。「恋」は多義的である、あるいは、多様なものを指示する。総合の方法はこれを「一つの姿へと導く」のであるが、その一つの姿はもはや「恋」ではなく、「狂気」である。多様なものを「恋」という形で一つに捕らえるのではなく、「恋」とは別のもの、この場合「狂気」として一つの

姿へと導くのである。それは何のためか。定義を与えるためである。多様なものを「恋」と捉えている間は、それに定義を与えることはできない。「恋」を定義するためには、「恋」を「恋」以外のタームで定義しなければならない。すべての恋は狂気であるが、すべての狂気が恋であるわけではない。すべての恋は狂気的一种であり、その定義は分割の方法といっしょになって成立する。恋には（少なくとも）二つの種類があり、一つは「肉体の美に対する人間的な病から生じる狂気」と、もう一つは、「美について神が与える狂気」と定義される。

以上から、弁論の技術の核心は定義にあることが読み取れる。説得においては、主題をどのように定義するかが決定的に重要である。技術によって説得する者は、相手をどちらに導きたいかに応じて、定義を巧妙に選択する。説得の成否はそれに大きく依存するのである。

1.4 「技術指南書」批判：266c-269c

問答法（ディアレクティケー）を説得の技術（の核）であるとするのが本来であるはずであるが、ソフィスト的弁論術の「指南書」の著者はそうしているのかというとそうではない。では、そういう「指南書」に書かれている技術とはどういうものなのか。その吟味が行われる。

結論としては、そういう指南書にかかっている様々な「技術」は実は、「技術以前の必要な学びごと（269b）」にすぎない、とされる。そして、医者、悲劇作家、音楽家、弁論家のケースが並べて論じられる。医者の場合、体を熱くしたり、冷くしたり、また、嘔吐させたり、下痢をさせたりできることは、医術ではなく、医術以前の事柄である。医術を獲得するためには、「そういうことのそれぞれを誰に、そして、いつ処方すべきか、また、どの程度まで処方すべきかかを知っている（268b）」必要がある、とされる。悲劇作家の場合も、小さなことがらについて非常に長い語りを作れることや大きなことがらについてとても短かいのも作れること、さらに、嘆きの語りや脅しの語りなどが作れることは、悲劇以前のことがらであり、悲劇には「それらのことがお互いに、そして全体に対してふさわしく構成されている（268d）」ことが必要であるとされる。また、音楽家についても、「非常な高音と非常な低音に弦を調弦して音を出すこと（268d）」は音楽以前のことがらであるとされる。これらと同じようにソフィスト的弁論術の指南書に書かれている様々な技法も、弁論の技術以前のことがらとされるのである。

1.5 魂の探求：269d-271c

ソフィスト的弁論術の教えるところが、技術の名に値しないことを確認した後、議論は、問答法に完全に戻っていくわけではなく、曲線的なやりとりを経て、弁論の技術についてさらに発展させられる。そこでは最終的に、(問答法の必要性と並んで) 説得を作り出す相手である魂の研究の必要性が主張されることになる。そこに至る対話の流れを確認しておく。まず、ソフィスト的弁論術の「指南書」の不適切さに同意したパイドロスは、「本物の弁論、説得の技術を、どのようにして、また、どこから人は調達できるのでしょうか」と問う(269c-d)。これまでの議論から考えて、答えは、「問答法(ディアレクティケー)によって」でなければならないように思われる。しかし、ソクラテスは直接そのように答えずに、トップレベルの者になるには他の場合と弁論術の場合は同じだと答え、それには素質、知識、訓練の三つが必要だと言う(269d)。弁論の技術には真実を知る必要があるという議論の文脈から重要なのは、二番目に挙げられる知識の中身と役割である。そして、その知識の中身と役割は、ここまで論じられた問答法(ディアレクティケー)についての内容を越えるものを含んでいると思われる。

まず、ソクラテスは理想の弁論家としてペリクレス^{*5}の名前を挙げ、「技術の中で重大なものはすべて、自然について無駄な長話と天空の探求(ἀδολεσχίας καὶ μετεωρολογίας φύσεως περί)をさらに必要とする(269e-270a)」と言う。そして、ペリクレスは、弁論については、その素質があったことに加えて、アナクサゴラスから「天空の理論(μετεωρολογίας)」を学び、「知性とその欠如の本性(φύσιν νοῦ τε καὶ ἀνοίας)」に触れ、そこから「言論の技術に対して、それにふさわしいことを引き出した」のだと言う。それはどういう意味かと尋ねるパイドロスに対して、ソクラテスは、医术と弁論術を比較して、どちらも同じ方法を用いるのだと言う。医术と弁論術は、どちらもそれが本当の技術であるならば、一方は身体の本性を、他方は魂の本性を分割する必要がある、と(270b)。そして、全体の本性を抜きにして、魂の本性を見て取るこ

*5 プラトンは他の多くの箇所でもペリクレスに批判的である(たとえば、『プロタゴラス』329a-b、『メノン』94a-b、『ゴルギアス』503c-d)が、『パイドロス』のこの箇所では、ペリクレスは理想の弁論家として評価されているように思われる。しかし、ソクラテスがペリクレスをあえて理想的弁論家としたのは、パイドロスを導く対話の中で、導く相手のパイドロスの魂の傾向、嗜好に合わせて、議論を構成したのだとみなせる。つまり、ソクラテスのパイドロスとの対話は、真の弁論術の一つの応用であると考えられる。Cf. Yunis, 209.

とはできない、と言う (270c)。この「全体の本性 (τῆς τοῦ ὅλου φύσεως)」についてどのように解釈するべきか。それには続く議論の内容をどのように理解するかが大きく関わってくる。ソクラテスはこのように言う。^{*6}

まず第一に、われわれがなにかに関して技術を持つ者となろうとし、また、他人もそういう者にしてやることができるようになろうと欲しているなら、それが単一の相を持つ (ἀπλοῦν) ものなのか、それとも、多様な相を持つ (πολυειδές) ものなのかを見なければいけない。そして、第二に、もし一方でそれが単一なら、その能力を考察しなければならない。作用を及ぼすことにかけては、何に対してどのような能力を本来持つものなのか、また、作用を及ぼされることにかけては、何によってどのような能力を持つものなのか、を。もし他方でそれが多様な相を (πλείω εἶδη) 持つのなら、それらを数え挙げた上で、単一のものについて見たまさにそのことを、それぞれについて見なければならぬ。つまり、それがどんな作用を何に対して及ぼす本性を持つのか、また、何によってどんな作用を受ける本性を持つのか、を見るのだ。(270d)

同じことについて、ソクラテスは少し先で弁論の技術を伝授するために必要なことを三つの要件に分けて説明している。一つ目はこれである。

弁論の技術を伝授しようとする者は、まず第一にきわめて正確に魂を描き、それによって (生徒に) 魂の姿を見させるだろう。それが単一で同質な本性を持つ (ἐν καὶ ὁμοιον πέπυκεν) のか、それとも、身体と同じく形態が多様である (μορφήν πολυειδές) のか、をね。(271a)

ここまでのところで、「多様な相」「多様な形態」などと述べられていることは、この箇所だけからは魂の各部分とも理解できるし、さまざまな魂のタイプ

^{*6} この箇所 (270d) でソクラテスが展開する理論は、身体については、ヒポクラテスの医学思想の内容であると従来考えられて来た。しかしそれにはあまり根拠がない。この箇所の直前でヒポクラテスやアスクレピオス派の名前を口にするのはパイドロスであり、ソクラテスはそれを「そういう権威にたよってはいけない」とやんわりとたしなめていると解釈する。パイドロスの思いつきは見当違いだったのであるが、ソクラテスはそれを許し自分の説を表面上ヒポクラテスに結びつけて述べているにすぎない。Cf. Yunis, 211-2.

とも理解できる。しかし、ソクラテスはさらに、二つ目の要件として、「何の能力によってどんな作用を及ぼし、また、何からどのような作用を受ける本性にあるか」を見させることを述べ、さらに第三の要件として、

三番目には、言論と魂の種類を、また、それ（魂）の受ける作用を詳細に分類した上で、すべての原因を論究するだろう。（言論の）それぞれを（魂の）それぞれに適合させ、魂がどのようなものである場合にどのような言論によってどんな原因から、必然的にあるものは説得され、あるものは説得されないのかを教えるのだ。（271b）

と言う。この箇所から考えて、魂の持つ（可能性がある）多様な相、多様な形態とは、魂の部分のことではなく、魂のタイプのことであると考えられる。

「全体の本性」については、これまで二つの解釈の間で論議が起こっていた。（1）「全体」は、宇宙全体を指す*⁷。（2）「全体」は、魂の全体（これが何を意味するのであれ）を指す*⁸。（1）については、たしかに、少し前のアナクサゴラスへの言及にはよく合致するが、文脈においてはこの「全体」の意味がその後で説明される形になっているにもかかわらず、その説明は上で見たように魂のタイプについてのものであることが大きな難点である。また、宇宙全体の本性を見るのがどうして魂のタイプの研究にとって必要なかが全く説明されていないことから、この解釈は取りにくい。（1）か（2）かという選択においては、近年の多くの解釈者と共に、（2）を取るべきであろう。

ただ、（2）を取るとしても「魂の全体の本性を見る」という表現は幅広い意味を持ちうる。この箇所では少なくとも二つの意味に解釈できるだろう。（2A）一つは、それは知性、欲望など魂のすべての部分にくまなく目を配ることを意味すると理解することである。これは「全体」という言葉のもっとも自然な意味である。（2B）もう一つは、「魂の全体」は、さまざまな魂のタイプを網羅した全体を指すと理解することである。つまり、魂がとりうるあらゆる形態を見るのが魂の「全体」を見ることだと言われていると考える解釈である。これは「全体」という言葉の自然な解釈とは言えないが、文脈にはよく適合する。ペリクレスがアナクサゴラスから学んだことには「知性とその欠如」が含まれていた。これは、魂の重要なタイプとしては、知性を持つものと

*⁷ たとえば Thompson, 123.

*⁸ Hackforth, de Vries, 藤澤など多数

そうでないものがあることと対応していると理解できるかもしれない。

解釈としてどちらかを選択するとするなら、(2B) をとりたい。とはいえ、(2A) (2B) の二つの解釈はそれほど厳密に区別できるわけではないかもしれない。魂の各部分のバランス、支配関係がどうなっているかが、魂のタイプを決めるのにもっとも重要な役割を果すのは当然である。ある魂は知性に訴えることによって動かされ、また別の魂は別の仕方でも動かされるであろう。魂の部分と魂のタイプは切り離せるものではなく、密接に関連する。「魂の全体を見る」とは、その二つを含めて述べられた言葉であろう。

1.6 ソクラテスの「指南書」概略：271c-272b

以上の議論を踏まえて、ソクラテスは、ソフィスト的弁論術の不適切な指南書に代わって、正しい指南書のガイドラインを示す (271c-272b)。ここでは、これまでの議論で主張されていたように、さまざまな魂のタイプがどのような言論のタイプによって、どのような原因によってどのような事柄へと説得されるかを体系的に研究することが求められる。この知識の段階を経たあと、さらに説得の実践の段階が示される。実践の段階では、自分が相手にする人がどのような本性をもつか、先に学んだ理論に当てはめて、どの言論をどのようなことの説得へと処方しなければならぬかを察知する必要性が語られる。さらに、いつ語るべきでいつ語るべきでないかのタイミングを把握し、ソフィスト的弁論術のさまざまな技法についても、それらをいつ使うべきかの機会を把握することが必要とされる。このような方法以外には、技術によって語り、書くことはできない、とソクラテスは断言する。

1.7 テイシアス論駁：272b-274b

このソクラテスの言葉に対して、それは実際に達成するのは大変困難な方法だとパイドロスはこぼす (272b)。ソクラテスは、もしこれよりも簡単な道があればよいが、結局のところ安易な道はないと結論する。ソフィスト的弁論術の代表者テイシアスは、説得するには、真実を知る必要などなく、ありそうなことで十分だ主張するが、テイシアスに向けた反論として、ソクラテスはこれまでの議論の要約を与える形で次のように述べる。

つまり、だれであれ人は自分の聴衆になるであろう人たちの諸本性をすっかり数え上げて、そして、有るものども (τὰ ὄντα) を形相の下に

(κατ' εἶδη) 分割し、かつ、一つの形相に照らして (μῆ ἰδέα) それぞれを一つのもの下に包括するすることができないならば、その人は言論について人間に可能なかぎり技術を持つ者となることはけっしてないだろう、ということです。(273e)

この要約を与えた直後、ソクラテスは、この獲得困難な方法を「人間たちに向けて語ったり行為したりするという目的のために引き受ける (273e)」ようなことはしてはならず、「神々に喜ばれることを語ることができること、また、神々に喜ばれるような仕方ですべてを可能なかぎり行為することができること(同)」に向けて用いなければならないと言う。真の弁論術自体は、どのようなことがらでも説得できる技術であるが、それをどのように用いるかも当然よく考えなければならない問題であり、ここでは、それが「神を喜ばせること」に向けるべきだと主張されている。この「神を喜ばせること」が何であるかは大きな問題であるが、本稿の主題を外れるものであるのでここでは立ち入らない。

このあと、ソクラテスは「言論の技術性、非技術性についてはこれで十分としよう (274b)」と述べ、最初の「書くこと」についての問題へと戻っていく。

2 プラトンの説得の技術

『パイドロス』で提示されている真の弁論術にとって、知識は大きく二つの要素に関わる。一つは、説得しようとする事柄についての知識であり、もう一つは、説得する相手の魂についての知識である。「本当の弁論術には真実を知る必要がある」ということがはっきり主張されているのは、前者の事柄についての知識についてである。後者の魂については、その知識が必要不可欠であるとは直接には述べられていない。しかし、これは当然なのであえて主張されていないと理解できる。というのも、相手の魂がどのようなタイプであってどのような言論によって動かされるかについての「真実」を知らずに、説得は成立困難であることは容易に納得できるからである。ソフィストの弁論家であろうとも、相手の魂がどのような言論によって動かされるかについて「ありそうなこと」で十分であると主張しそうにない。彼らはその魂を深く探求するということをしないだけであって、当然自分の言論によって「本当に」相手が説得

されやすいはずだという仮定に基づいて説得するはずである。要するに、相手の魂研究については、真実を知る必要があるかという文脈では、ソフィストの弁論家との争点にならない。

問題はやはり、説得しようとする事柄について真実を知ることが、本当の弁論術にとって必要かどうかである。これを見るためにまず、上のテキスト解釈からプラトンの方法のエッセンスをできるだけ一般的な形で抽出したい。

2.1 プラトンの方法の二段階

プラトンの説得の技術は問答法的段階と言論構成段階の二つから成立している。上で述べた二種類の知識のうち、説得する事柄についての知識は問答法的段階において、魂についての知識は言論構成段階においてそれぞれ必要とされる。

2.1.1 問答法的段階

「X」が異論のある言葉であるとする。つまり、人々が「X」で何を思い浮かべるかはまちまちである。「恋」の場合もそうだとされている。真の弁論家は問答法により、その「X」すべてを一つの相「Y」の下に見る。テキストでは、「恋」を一つの相「狂気」の下に見た。そして、「X」を「Y」によって定義するために、「Y」を分割法によって分割していくが、最終的に、「X」に対して賛否両論を構成するためには、「Y」を分割するどこかの段階で、「よい」「悪い」の別が導入されなければならないだろう。善悪が導入される直前の段階で「Y」がすでに何段階か分割されているかもしれない。その場合すでに「X」を含む類は「PQ...Y」という形になっているだろう。これをまとめて「Z」とする。「恋」の場合、善悪の導入前の分割はなく、「Y」と「Z」は同じ「狂気」である。さて、善悪を導入する分割において「X」は左右に分かれる。「nZ」（左のZ、悪いZ）と「NZ」（右のZ、善いZ）である。「恋」の場合善悪を導入する分割は、最初の分割で導入され、「n」は「人間的な病による」であり、「N」は「神が与える」である。それによって左の狂気「nZ」は「人間の病による狂気」となり、右の狂気「NZ」は「神与の狂気」となる。このあとの一般的な手続きとしては、分割はさらに続けられ、最終的に左の「X」は、「abc...nZ」、右の「X」は「ABC...NZ」という定義を与えられる。「恋」の場合、この分割は一段階で終わっている。最終的に左の恋は「nZ」である「人間的な病による狂気」のうち「肉体の美に向かう」という「a」によって分割

されたもの、「肉体の美に向かう人間的な病による狂気」という「anZ」という形で定義される。そしてそれは、「食べ物に向かう人間的な病による狂気」＝「暴食」や、「酒にむかう人間的な病による狂気」＝「アルコール依存^{*9}」などと並べて置かれる。同様に、右の恋は「NZ」である「神与の狂気」のうち「美のアイデアに向かう」という「A」によって分割されたもの、「美のアイデアに向かう神与の狂気」という「ANZ」という形で定義され、他の三つの神与の狂気である予言、秘儀、詩的靈感と並べられる。

2.1.2 言論構成段階

上の問答法的段階はいわば説得の言論を構築するための予備作業である。実際の説得の言葉はどのようになされるか。それは相手の魂のタイプに応じて変わるはずであるが、大まかには次のようなことになるだろう。

ソクラテスの最初のスピーチでは、恋が悪いものとされるが、その際、話し手は良い恋の存在にはまったく言及していない。それに対して、パリノーディーアでは、当然ながら、先の話の中で言及されていた悪い狂気、そしてその一つとされた人間的病としての恋の存在も前提されている。つまり、ソクラテスの最初のスピーチでは、あたかも悪い恋、左の恋が恋の全体であるかのように語られているのに対して、パリノーディーアでは、右の恋だけでなく左の恋の存在が認められた上で語られている。話し手は他方の存在を隠すことができ、それが説得に有効な場合にはそうするだろう。この場合、一種の欺きが生じる。「X」の定義を「abc...nZ」と提示するのみで、実は「ABC...NZ」も「X」でありうることを隠す。それが有効である場合、説得に導く議論は容易に構成できる。相手は、悪い方の「X」つまり「abc...nZ」のみを提示されるのだから、それが定義されるところからの帰結をうまく相手に伝えればよい。そして、その際「nZ」のうち「X」と「X」以外の他の悪いものを並べて列挙し、「X」はそれらと同類の悪いものであると主張するのである。この類同化がまたもうひとつの欺きである。

他方、(パリノーディーアがそうであるように) 反論をおこなう場合など、他方の定義を隠すことが不可能であったり有効でないときは、弁論家はそれを認めた上で説得をおこなう。その場合弁論家にはいくつかの選択肢がある。「X」は実は「abc...nZ」ではなく、「ABC...NZ」であると主張することもでき

^{*9} テキストでは、この狂気の種類の名前は挙げられず、「どのような名前が与えられるかは明らかである (238b)」と述べられている。

るし、「X」の大多数は「abc...nZ」ではなく「ABC...NZ」であると主張することもできる。あるいは、単に「X」は「abc...nZ」だけでなく「ABC...NZ」も存在すると主張することもできる。いずれにしても、弁論家はもう一方の定義「abc...nY」に対して、なんらかの対応が必要である。パリノーディアーの場合、どうなっているか。二つのスピーチを振り返って述べられている265e-266bの箇所では、左右の恋は対等の関係であるように語られているが、パリノーディアーそのものの中では、「本当の恋 (255a)」という言い方からも、「ANZ」つまり、「美に向かう神与の狂気」の方が正しい恋の定義であるとされていると考えられる。左の恋は実は本当の恋ではない、という形で論じることをパリノーディアーの弁論家は選択したのである。

いずれにしても、この言論構成段階では魂についての知識が必要である。説得する相手の魂がどのようなタイプであるか、そしてそのタイプの魂がどのような言論によって動かされる傾向があるかについての知識に基づいて、弁論家は実際にどのような言論を構成するかを決定しなければならない。

2.2 真実を知る必要性

このように、プラトンの方法は二つの段階からなるものであり、説得する事柄についての真実を知ることが必要とされるのは、その二つの段階のうち最初の間答法的段階においてである。弁論家はその間答法的段階において、たとえば「恋 (X)」や「狂気 (Y)」といった語がどのような(多義的な)意味を持つかを知る必要がある。真実を知ることなしに、間答法的段階で同じような作業ができないのだろうか。たとえば、「恋 (X)」が「狂気 (Y)」の下にあることをこの作業では知る必要があるが、それが真実である必要があるだろうか。「恋 (X)」が「狂気 (Y)」の下にあると「思われている」だけでは十分ではないのだろうか。しかし、この問いは空転しているように思われる。「恋 (X)」や「狂気 (Y)」が多義的に何を意味するかについての真実は、当然話者たちの思いなしと一致しているはずである。弁論家は「恋」や「狂気」を通常の意味とは別の意味で用いている人たちを相手にするわけではない。弁論家は人々に「恋 (X)」や「狂気 (Y)」と「思われているもの」を知る必要がある、それはわれわれの言語において「恋 (X)」や「狂気 (Y)」が何を意味するかについての真実である。したがって、「真実を知る必要はない」とは言えない。このことは、間答法的段階全体について当てはまる。

したがって、プラトンの方法によって有効な説得の議論が構成できるとする

ならば、「この有効な説得の方法（の問答法的段階）においては、（言葉についての）真実を知る必要がある」という主張は十分納得できるものである。さて、プラトンの方法は有効な説得の議論を構成できるのだろうか。

2.3 応用の試み

プラトンの提示する真の弁論術が、一般的にどのような形で相手を説得する議論を構成するかを、おおまかに理解するために、テキストで語られている事例である「恋」以外のケースで、この方法を応用する例を二つ考えてみたい。どちらの場合でも、この方法が相手を説得する議論を構成する有効な手段の一つであることが示されると考える。

2.3.1 「移民」の例

たとえば、「移民を受け入れるべきか」ということが議論になっているとする。「恋」と同様に、「移民」という言葉で人は様々なことがらを思い浮かべる。本当の弁論家は問答法により、その「移民 (X)」すべてを一つの相「Y」の下に見る。そして、「X」を「Y」によって定義しようとするはずである。たとえば、「移民 (X)」が「移動 (Y)」の一種であると見てとって、さらに「移動 (Y)」の中には、「物の移動」、「人の移動」などがあり、「移民 (X)」がすべて「人の他国への移動 (Z)」の一種であることを見て取る。さて、人を移民の受け入れに対して賛否両面に動かそうとすると、どこかの分割で、「よい」「悪い」の別が導入されなければならない。「移民」の場合、たとえば、「人の他国への移動 (Z)」に悪いものとして「不本意な (n)」ケースと、善いものとして「自らすすんでおこなう (N)」の区別を導入できるかもしれない。さらに、それによって得られた「不本意な人の他国への移動 (nZ)」と「自らすすんでおこなう人の他国への移動 (NZ)」のそれぞれをいくつかに分類する。前者には、理由に応じて「国外追放」＝「違法行為による不本意な人の移動」、「国外避難」＝「自然災害による不本意な人の他国への移動」などと並んで左の「移民」があり、それは、たとえば、「経済的理由による不本意な人の移動 (anZ)」と定義される。他方、後者には、「救援移住」＝「相手を助けるため自らすすんでおこなう人の他国への移動 (NZ)」などと並んで右の「移民」があり「他国民になるために自らすすんでおこなう人の他国への移動 (ANZ)」と定義される。

以上の問答法的段階を終えた弁論家は、相手の魂に応じて実際の説得の言論

を構成する。まず、移民受け入れに対して賛成の議論を構成するか、反対の議論を構成するかに応じて、どちらかの定義を採用する。そのとき、できればもう一方の定義の存在は伏せて置くが、それができない場合は「本当の移民」は、こちらである。あるいは、「大多数の移民」はこちらである、あるいは単に移民の一部はこちらである、という主張をすることになる。後は、定義から帰結することがらを、相手の魂に合わせて、タイミングを計り、必要に応じてソフィスト的な弁論の技法を用いて、説得の議論の実践をおこなう。移民受け入れ反対を論じるなら、移民のうち少なくともその一部は「不本意」であり、不本意な行為が一般的に悪い結果をもたらすことを論じるであろう。そして、そのとき、「移民」を「移民」以外の他の「不本意な人の他国への移動 (nZ)」である「国外追放」や「国外避難」と類同化することで議論に説得力をもたせようとするだろう。逆に移民受け入れ賛成を論じるなら、同様に、移民のうち少なくともその一部は「自らすすんでおこなう」ケースであり、自発的な行為が一般的に善い結果をもたらすことを論じるであろう。そして、その際、「移民」を「移民」以外の他の「自発的な他国への移動 (NZ)」である「救援移住」と類同化することが説得に有効ならば、そうするかもしれない。

2.3.2 「鉄の採掘」の例

真の弁論術は「どんな二つのものでも似せて見せることができる (261e)」ものである。このことからその技術は、主題、テーマを選ばないという点で普遍的な技術であると考えられる。しかし263aでは、たとえば、「鉄」や「銀」という言葉のように、人が皆同じものを思い浮かべることがらではなく、「善」や「悪」(や「恋」という異論のあるものについてのみ説得が成立すると言われているように思われる。ここには食い違いはないのだろうか。

簡単な解釈としては、「どんな二つのものでも」には「(異論がある) どんな二つのものでも」と暗に限定が付けられている、と理解することであろう。そして、「鉄」や「銀」についても人々の意見が対立する可能性は十分ある。「鉄」や「銀」そのものについては皆が同じものを思い浮かべるとしても、たとえば、それらを「輸入すべきか」とか「採掘量を増やすべきか」とか「飛行機の材料に用いるべきか」などについて意見が対立するかもしれない。その場合、「善」「悪」などの言葉を使って対立が生じるかぎり、その定義を用いて真の弁論家は議論を構成できるだろう。

そのような例として、たとえば、「鉄の採掘量を増やすべきか」が問題に

なっているとしよう。弁論家は、まず定義されるべきものを選択しなければならないが、「鉄」は異論の余地がないものなので、定義の対象とすることはできない。そこでたとえば、「鉄の採掘量の増加 (X)」を定義の対象として選ぶかもしれない。真の弁論家はこれを何らかの類「Y」の「下に見る」必要がある。それを「量の増加 (Y)」としよう。弁論家は総合の方法でもって、あらゆる場所に散らばっている Y を見て、一つの相の下に見る。そして、それを分割の方法を用いて「鉄の採掘量の増加 (X)」の定義へと導いていく。「移民」の場合と同様にいくつかの分割を経て、「自然資源の採掘量の増加 (Z)」に至り、次の分割で善悪両方に分ける。左右を隔てるのは何による分割であろうか。たとえば、弁論家は「採掘される場所の自然環境に配慮している (N)」かどうかによる分割に着目するかもしれない。それによって「採掘される場所の自然環境に配慮していない、自然資源の採掘量の増加 (nZ)」と「採掘される場所の自然環境に配慮している、自然資源の採掘量の増加 (NZ)」が分割される。そして、それぞれに「鉄の (a,A)」が加えられることによって、「鉄の採掘量の増加 (X)」の二つの定義が得られる。つまり、「採掘される場所の自然環境に配慮しない、鉄という自然資源の採掘量の増加 (anZ)」と「採掘される場所の自然環境に配慮した、鉄という自然資源の採掘量の増加 (ANZ)」である。これで問答法的段階は終了である。

そして言論構成段階では、先の場合と同様に、「鉄の採掘量の増加 (X)」に賛成、反対の立場に応じて、どちらかの定義を採用し、もうひとつの定義は無視するか、X の本当の定義は一方（「anZ」または「ANZ」）であると主張するか、あるいは X の大部分はそれであると主張するか、あるいは、単に両方の場合があることを認めるか、いずれかの戦略を取る。仮に単に両方の場合があることを認めたとしよう。弁論家は、もし「鉄の採掘量の増加 (X)」に反対の立場で論じるなら、X が自然環境に配慮しないもの (anZ) になる傾向が大きいことを強調するだろう。逆に X に賛成なら、それが自然環境に配慮してなされるもの (ANZ) になる見込みが高いことを論じようとするだろう。説得する相手の魂がどのような言論によって動かされやすいかの知識を動員して言論を構成するのは先と同様である。

3 結論

本論文では、まず、プラトンが『パイドロス』において提示する真の弁論術

が、特に真実を知ることとの関連でどのようなものとされているかについてテキスト上の解釈を提示した。その解釈に基づいて、真の弁論術において「真実を知る」という知識は、説得する事柄を対象とする側面と説得する相手の魂を対象とする側面の二つを持つことが明らかになった。後者について、この弁論の技術が「真実を知る」必要があることは当然である。前者は、プラトンの方法の二つの段階（問答法的段階、言論構成段階）のうち問答法的段階に関わる。そこで必要な知識は議論が扱う事柄に関わる言葉が何を意味するかを対象とする知識であることから、その知識は不必要であり思いなしで十分代用できると反論することはできない。ただ、真実を知る必要性についてのプラトンの主張が的確なものであると言えるためには、プラトンが真の弁論術として提示する技術が、実際に説得を構成するための有効な方法でなければならない。その可能性を探るために本論文では、プラトンの言う真の弁論術の方法の実践的な応用例をあえて試みた。プラトンの方法がどの程度現実の使用に耐えうるかは、少なくとも論じる価値のある問題であることが示されたと考えられる。

■参考文献

- de Veries, G. J., *A commentary on the Phaedrus of Plato*, Amsterdam, 1969.
- Hackforth, R., *Plato's Phaedrus*, Cambridge, 1952.
- Nehamas, A., and Woodruff, P., *Plato's Phaedrus*, Indianapolis, 1995.
- Robin, L., Moreschini, C., and Vicaire, P., *Platon: Phedre*, Paris, 1985.
- Row, C. J., *Plato: The Phaedrus*, Warminster, 1986.
- Ryan, P., *Plato's Phaedrus: A Commentary for Greek Readers*, University of Oklahoma Press, 2012.
- Scott, D., 'Philosophy and Madness in the *Phaedrus*', *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, 41 (2011), 169-200.
- Thompson, W. H., *The Phaedrus of Plato*, London, 1868.
- Yunis, H., *Plato: Phaedrus*, Cambridge, 2011.
- 藤澤令夫、プラトン『パイドロス』註解、岩波書店、1984。